

2021年3月20日
四旬節第5主日
菊地功大司教 メッセージ

「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くのみを結ぶ」

四旬節も終わりに近づき、聖週間から御復活のお祝いが視野に入る時期となりました。感染症の状況は継続していますが、十分な感染対策をした上で、復活祭を迎える最終準備を進めたいと思います。

イエスは、間もなく訪れるご自分の受難と死を念頭に置きながら、ご自分の死が多くの人の救いのために必要なのだということを、弟子たちに語ります。

この言葉は、わたしたちに、キリストの弟子としてどのような生き方を選択するべきなのかを、明確に示しています。自分の周りに壁を打ち立て、隣人の必要を顧みずに自分を守ろうとすると、その種は、実を結ぶことなく朽ちていくことでしょう。

エレミヤは、「わたしの律法を彼らの胸に授け、彼らの心にそれを記す」と述べて、新しい契約について預言します。イエスの受難と死を通じて結ばれる新しい契約は、まさしく、自らを捨て、他者のために生きようとする心の姿勢を求めるものであり、それは知識によるのではなく、掟の強制によるのではなく、心に刻まれた神の思いに基づくことなのだと言います。わたしたちは、イエスが弟子たちに語ったその思いを、心に刻みたいと思います。

パウロはヘブライ人への手紙で、キリストの従順について語ります。苦しみを避けるのではなく、その中に身を置きながら、神の導きに完全な信頼を寄せることによって、キリストは完全な者となり、従う者に対して永遠の救いの源となったと記します。

他者のために徹底的に自分の人生を献げ、困難に取り囲まれる中でも、神の意志に従順であった人物として、聖家族の長である聖ヨセフがあげられます。ちょうどこの3月19日は聖ヨセフの祝日でしたし、また教皇フランシスコは、福者ピオ九世が1870年12月8日に、聖ヨセフを「普遍教会の保護者」として宣言されてから150年となることを記念して、今年の12月8日までを「ヨセフ年」と定められています。

使徒的書簡「父の心で」において、教皇は、「目立たない人、普通で、物静かで、地味な姿の人」である聖ヨセフの内に、「困難なときの執り成し手、支え手、導き手を見いだすはずです」と指摘されます。

その上で教皇は、「ヨセフの喜びは、自己犠牲の論理にではなく、自分贈与の論理にある

のです。この人には、わだかまりはいっさいなく、信頼だけがあります。その徹底した口数の少なさは、不満ではなく、信頼を表す具体的な姿勢です。・・・(主は)、自分の空白を埋めるために他者の所有物を利用しようとする者を拒み、権威と横暴を、奉仕と隷属を、対峙と抑圧を、慈善と過保護主義を、力と破壊を混同する者を拒みます。真の召命はどれも、単なる犠牲ではなく、その成熟である自己贈与から生まれます」と述べています。

許嫁(いなづけ)であったマリアに起こった出来事とそれに続く神からの呼びかけに対する、聖ヨセフの姿勢は、信仰とは教条的でもなければ、かといって自分勝手なものでもないことを教えています。信仰の本質は自分ではコントロールできないところにあること、そしてそれを受け入れるところにあることを、聖ヨセフの生き方が教えています。

聖ヨセフの模範に学びながら、御復活に向けて、四旬節を締めくくってまいりましょう。